

一本一本の線が筆とインク、または色鉛筆で精巧に描かれている高島進のドロ잉は、無意識的な行為である呼吸を思わせる機械的な精巧性で曲がり、広がり、渦巻く。私達の生活が本来の目的や計画から逸れるようにアートは線で始まり別の線で終わる。

そして、それらの線の間には無数の可能性と不確実性がある。高島の作品の可能性は、彼の創作で用いられる手段から始まる。彼がインクを含んだ筆で描いた線は繰り返される度に細く、薄くなって行き、色鉛筆で描く線は描かれる度に太くなる。無意識的であるのと同時に意図を持つ作品を生み出す事で高島は、息を吸って吐く事が無意識的でありながら生命を維持するという目的を持つ行為である事を喚起する。

ジョン・トーマス・トレンブレイが今号の序説で適切に書いているように、高島の作品を見ていると、この作家が呼吸を可視化しているのではなく、呼吸の特質(私達が自分や他人の息を意識する時に感じるそれ)を浮かび上げているという事が分かる。「筆、インクと紙のためのドロ잉」Ic (陽)青紫:緑:オレンジ=6:1:2 は青紫、緑、オレンジの渦の、厳重な規則正しさを描かれた線が忍び寄る暗闇の幻想的な「穴」と出会うところで捉えられなくなるまで追っている。この作品の線は、呼吸についたり考えたり感じる事を私達が制御できるのと同時に制御外であることを暗示している(これには瞑想による呼吸のコントロールと、真逆の状態である、不安から発生するパニックやエクスタシーが含まれている)。

高島は、呼吸の反復とその道のりを描く一まるで詩句が、息遣いが聞こえてきそうな考えや感情の波、間(ま)、告示を捉えるように。

ジェシー・エリザベス・アルペリン